

第九編
社寺・史跡

第一章 神社

一 飯富神社

所在地 大字三体堂字登迫六六一番地イ
 祭神 倉稻魂命 天照大神 天兒屋根命
 合祀社 (櫛神社)
 祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命
 例祭
 ・一月一日・一月七日・三月二十一日
 ・九月二十九日

(注) 三月二十一日の例祭には氏子青年たちで稻造行事
 が行われている。

夏越祭
 •七月二十九日・十一月二十三日
 由緒についてはほとんどわからない。

飯富神社は、大字三体堂字登迫にある。社説には延喜

(九〇一～九三〇年)・応和(九六一～九六三年)のころの建立であったという。現在、社記の類は何もない。

天正二年(一五七四)の棟札が昭和五十九年の改修の際

天井裏から発見された。貞享元年(一六八四)の「三体堂壱所衆加精之人數」という奉加帳

(板)が現存している。藩政時代は谷川氏が祠官としてこれを管理してきた。

なお、社殿の

後ろ左側に正徳五年(一七一五)

の銘のある山神がある。これは今から二七六年前、三体堂領主、新納氏の時代に建立されたものと思われる。

山神の左側に「奉寄進」と書いてある小さい石塔が建っている。これは裏面に寛文六年(一六六六年、今から三三五年前)と書いてあるから、山神に寄進したものでなく飯富神社に寄進したものと思われる。



飯富神社

所在地 大字方膳新改八〇六番地
祭神 応神天皇 桑田大明神 六ノ宮大明神
例祭 三月二十八日
道御本尊

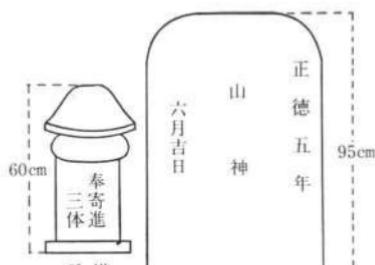
一 八幡神社

また、神社の入り口に次の境内神社がある。

若宮神社 祭神 応神天皇 由緒不明
門守神社 祭神 八幡比古命 八幡比売命



石塔・山神



御田植祭 六月十五日
七夕祭 八月七日
豊祭 十一月十日
神社宝物貴重品

太鼓 一張
神舞面（木製）二面

境内神社

若宮神社

祭神及び由
緒不詳

門守神社

右に同じ



60cm
石塔

95cm

「万善家系図」にその由緒を次のように記している。

「建仁二年（一一〇二年）の比幡野郡三百五拾町ノ内上三体堂ノ内、万膳越後守源弘章居住候節大平等申所へ源氏ノ氏神石清水正八幡宮ヲ崇奉ル由、古帳ニ有之候」建仁二年隅州桑原郡踊万膳に越後守源弘章と云う人居住の節大平の国竜造寺隆信故ありて合戦に及び此の戦に勝利を得るが為に越後守遙々と京都に上り石清水正八幡宮の御本尊三体を勧請して帰り而して戦勝祈願を懸けたる上更に御神体を奉して隆信と合戦を致せし処武運強く遂に隆信の首を打取り引き揚げたり。故に越後守はその後八幡宮を氏神として祭りたる後天明二年（一七八二）頃に至り社を建て次て土



八幡神社



伊邪那岐神社

地の名を取り大平八幡宮と符して祭りたり。之が即ち万膳八幡神社なり。

一氏神社正八幡大菩薩（万膳家の氏神）

山州石清水仁王五十六代清和天皇即位貞觀二年己卯（八

六〇）豊前国宇佐八幡を遷男山鷲峯号正八幡仁王十六代
応仁天皇靈社也。

三 伊邪那岐神社

所在地 大字下中津川字後迫四二七番地
祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命 倉稻魂命

天日鷦命

例祭 春祭 三月二十二日

お田植祭 六月十日

夏越祭 七月二十九日

方祭 九月二十九日

霜月祭 十一月十日

七月二十九日の夏越祭には七歳の童子が真茅^{がや}を奉納し、これで茅の輪といふ輪を作り七歳児のお祓いをした。なお、この行事は元亀一年（一五七一）から実施されているという。

1 由緒

建立の年月不明、永享九年（一四三七）、税所敦武が社殿新設の折の棟札、元亀二年（一五七一）社殿修營の棟札

(地頭伊集院下野入道久通)があつたという。

最初妙見崎に鎮座されていたが、その後、今の社地から南西約一〇九メートルのところに遷座になつたが、大正十三年(一九二五)六月七日の夜の大雨で社殿が砂石

に埋まつたので現在地にうつしたという。藩政時代は上原氏が社司として管理した。

この神社は元妙見神社と呼ばれていたが、明治の初め廢仏毀釈、神仏分離の趣旨で伊邪那岐神社と称したものと思われる。

2 境内の仁王像

神社境内の入り口右側と左側に高さ各一メートルの巨



仁王像

像(石造)が一体立っている。左側の像の裏側に寛文八年(一六六八)三月吉日の銘がある。像は彫りがあらく、いかめしい面相をした石像である。

四 翼神社

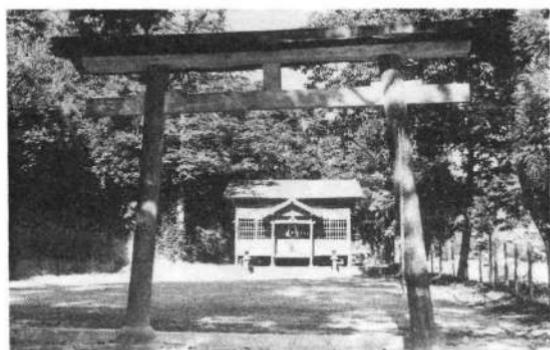
所在地 大字持松字前田一六番地
祭神 思比壳命 市杵島比壳命 天太玉命

高津比壳命 天兒屋根命 於加美姫命
於加美神

例祭 三月二十四日
1 由緒

霧島神宮末社として、天文二十一年(一五五二)北郷讃岐守忠相、尾張守忠親が造立したという棟札があったという。正徳二年(一七一二)、信徒の協力をもつて改造し、宝暦十一年(一七六一)、氏子協力し再度改造した。これが現在の社宇である。維新後も氏子により少々の修理があつた(以上、霧島神宮保存明細帳写)。

天正四年八月島津義久公同義弘公より三原遠江殿を御使として当神社に豊後大友御退治の立願あらせられ、次後百



堅 神 社

六十九年怠なく
御祭神料御供用
あらせられ、後
義久、義弘及び
義久公御嫡女於
加美姫の三人当
所に御宿泊中の
助勢を待ち堅神
社の建立なり、
於加美姫又深く
この神を信ぜら
れしを以て後當
社に合祀すると
いう。

明治四年四月、
管轄庁から持松村村社として定められ、その後昭和三年
八月、氏子協力して本殿、拝殿を改築する。

2 境内神社

山神社 祭神 大山祇命 由緒不明

五 温泉神社

所在地 大字宿窪田安楽四一九一番地
祭神 大穴牟遲神 少名毘古那神 伊弉册尊
配祀、国狹土神

例祭 春、秋彼岸入りの翌日

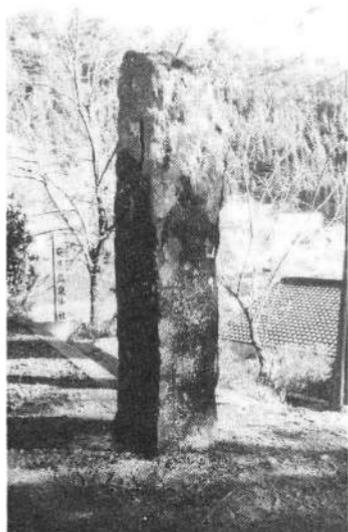
1 由緒

大永三年（一五二三）に書かれた社記には、次のような意味のことが記されていたという。

すなわち、「康



温 泉 神 社



温泉神社石碑

(二) 一人の聖、熊野権現を笈に入れ負い来りて、岩上に安し此地に一宿し、明日笈を擧んとせしに動かずして重き事磐石の如し、時に神、潛に告て曰く此地に温泉出べし、安楽に居住を得つべしと。是において、即ち権現を岩上に建立す。今にその大岩、当社の右にあり、其後、聖本邑の女子に縁を結び夫婦と成てここに居住せしに、果して権現の冥助ありて温泉湧出す、因つて安楽と名づけしとぞ、代宮司を奥村阿波と呼び、権現を守りし聖の子孫」という事になつてゐるようである。天正十年（一五八二）肝付彈正が社殿を修造した時の棟札が伝えられてきたという。ただ文化二年（一八〇五）建立の石

灯籠形式の石碑があり、これには次のような碑文が記載されている。

桑原郡踊郷安楽之温泉之傍在宮社謂熊野大権現何年□人不知建造也天正十壬午年肝付彈正謂復□□□之而不詳審諸國雖多所温泉出治病之効□□□□夫温泉之為効哉助氣溫体安血通澑□□□□宜暢皮膚明眼目弘上氣治諸病脾□□□内者可□之温泉之性不等一如是温泉氣味柔順而



安楽神社 お石さま



磨崖仏

自然石五角形、畳四、五枚くらいの大きな石で、由緒の聖が笈をおろした石と伝えられる。

4 磨崖仏

温泉神社の西方三〇メートルの山中に高さ七七センチメートルの磨崖仏（座像）がある。これは最近安栖武一が掘り出したものである。

六 和氣神社

所在地 大字宿窪田三九八六ノ乙

祭神 和氣清麻呂

無所咎障而治病甚速也以此考之必可依神之氣□予文化二乙丑暮秋來於此地浴溫泉功驗□證明也
亦其功能人々□所稱脅溫泉之功驗記
其事刻石建石奉神前
于時文化二乙丑暮秋

西藩元蘭_{ニシハラ}記

2 境内神社

伊勢神社（祭神、豊受須彌神）が鎮座する。

御神靈を奉じ、各氏子中を一年間巡駐祭祀した。大正十三年、境内に社殿を建て奉祀した。なお、祭祀儀式の折海中砂を御塩と称し秋分の日の祭典に神饌に供した。

3 お石さま

堂、昭和十四年四月、肇國精神修養道場がいすれも公の

和氣清麻呂が神護景雲三年（七六九）、道鏡のために大隅国中津川すなわち牧園町下中津川稻積の里に流されたことは史実に明らかである。牧園町民並びに公の崇敬者間に遺跡顕彰及び和氣神社創設の声が広く起り、昭和八年十月、牧園村会において和氣神社創設に関する案が議決され、翌九年には県議会において同案に関する建議案が満場一致で採択された。

昭和十二年四月、現在遺跡に建設されている和氣祠

の陳情、請願の結果、ついに昭和十七年五月六日をもつて、公の遺跡に、和氣神社創建の許可が県知事から下り、昭和十八年十月十三日に地鎮祭が行われ、終戦後二十年十一月二十五日に宏大、壯麗な社殿が完成し、翌二十一年三月十八日に鎮座祭が行われたのである。



和氣神社

こうして度々道場に集い来る者が多くなつた。

川小学生による、健児団、中津川婦人会による和氣婦人会が結成され、公の精神を学ぶべく、和氣祠堂、

七聖神社



七聖神社

所在地	大字上中津川通山一〇五二番地
例祭	歲旦祭 一月一日
	春分祭 三月二十一日
	夏越祭 七月二十九日
	秋分祭 九月二十三日
	新嘗祭 十一月二十三日

聖
神
聖
明
神

由
緒
不
詳
神社貴重品
什器
一
銅鏡
一
棟板
一
大正四年現在

地に移転した。

八 水天宮

甲辺の水天宮は、その神像（石像）の持つている宝索ほうさくが「まむし」に似てゐるので、マムシ除けの神として信じられてゐる。

が、元來は灌溉かんがい用水の守護神として祭られたものである。



水天宮（甲辺）

所在地 大	辺	字持松甲
例祭	神像一体	祭神
六月二十		甲辺
だし旧		



神像（轟水天宮）

（注）以前は秋祭りも実施していた。
由緒については、明確な記録は現存していない。
また、この神像と同じ石像が町内轟木にもあり、轟木
水天宮の祭神として祭られている。

暦

第二章 仏 閣

一 正 福 寺

所在地 大字宿窪田二二八六番地

名称 高照山正福寺

宗派 浄土真宗本願寺派（西本願寺）

創立 正平年間（一三四七～五七の間）

開基 懷良親王

淨土真宗帰属

第一世住職 慶山法師 以下血脉相続にて、第二世円智

第三世恵山 第四世不明 第五世廻照院惠嶽 第六世惠觀

第七世得証院惠發 第八世智光院惠明 第九世靈超 第十

世遍照院智燈 第十一世淨照院靖之 第十二世一樹院尚道

と相承し現在第十三世禮之住職

正福寺縁起によると、

正福寺の縁起を案するに、後醍醐天皇第九皇子懐良親王、南朝の征西大將軍に任せられ、四国、薩摩を経て、肥

後八代郡高田御所に在す時（正平二年＝一三四七～正平十
二年＝一三五七）父帝（後醍醐＝建武四年＝一三三九、吉
野にて崩御）の菩提を弔い給わんが為に、八代郡宮地村の
勝地をトし、悟真寺外十六ヶ寺の禪利を創建し給う。本寺
はその一にして、親王薨去（弘化三年＝一三八三）の後、
南風鏡わず、従つて寺亦漸く衰う。降つて元龜天正の戦国
時代を経、寛文延宝の頃に至りては、唯僅かに正福寺の古跡を
存するのみ、天和二年（一六八二）僧慶山、空しく古跡の煙滅
せんことを慨き、淨土真宗に改めて再興を出願し、同年六月
十一日政庁の許可を得たり（現存す）依て堂宇



正福寺

783

を建立し、旧觀を改む。爾來嘉永二年に至り、（第九世靈超）七月十三日曉、祝融の災に罹りしを以て、更に再建復旧せしが、明治十年（第十世智燈代）西南の役の兵燹に遭い、堂宇古文書、為に烏有に帰せり。茲に於て第十世第十一世の二代に亘り、更に本堂、庫裡を再建（明治二十年）せしも、門徒僅少の為維持困難を増し、遂に由諸ある古跡の廃滅を恐れ、熊本縣當局の許可を乞い、明治三十七年五月十二日付許可を得て当村に移転し今日に至つた。

又現在の寺院、境内地の沿革は、次の如し。

蹕説教所創立願 明治十三年四月三日

本願寺別院受付許可 明治十三年四月十二日

説教所建設願

戸長 山口直左エ門受付同年四月三十日県令岩村通俊
聞届 第六八一號

明治十三年五月七日付、を謄写とする。

明治十四年、本山より方便法身尊影御下賜

同年三月二十五、六の両日、遷仏法要並開所式

その後数名の布教員を経て、明治三十三年より渕本某布教員、三十五年、村井得忍開教使が駐在、明治三十六年二月十二日開教使、西藤靖之師着任、明治三十七年五月十二日、正福寺の寺号、及び住職がそのまま移転す。

明治四十三年、本堂及び書院完成

大正九年 宗祖聖人六百五十九回忌歿修

昭和三年一月十四日、第十一世靖之遷化 同年四月六日 第十二世尚道住職拝命

昭和五十三年三月三十一日、第十二世引退 同年四月一日 第十三世禮之住職拝命

同年四月一日 第十三世禮之住職拝命

法宝物（主なもの）

一、蓮如上人御真筆名号本尊 一幅

一、阿弥陀如来立像 一尊 正徳元年造

一、宗祖親鸞聖人御影一幅 寂如（一六六一~一七二五

間）上人御判

一、聖德太子繪像 一幅 寂如上人御判付

一、七高僧連座御影 一幅 寂如上人御判付

一、蓮如 広如御連座御影 一幅 明如上人御判

これらはすべて八代正福寺から将来したもので、住職の私せるものではないが、西藤家と共に伝えられたものである。教義その他は宗派の定めるところ、教化組織は、仏青、仏婦、仏壯、また幼児保育の薰染保育園がある。

二 高 台 寺

定例により行う。青年会、婦人会、日曜学校など
。臨時布教

。隨時

。特殊布教

学校、官公庁、会社、工場など

所在地 大字高千穂三八六四ノ五
名 称 浄土真宗興正寺派高台寺
宗 派 親鸞聖人を宗祖と仰ぎ本山興正寺

を中心とした宗教団体
法人

教義

真宗教学教義

を伝道し教養
と人格の養成

につとめ説

教、講演、文

章伝道を主と
する。

布教には、恒

例、臨時、特殊

の三種がある。

。恒例布教

- 。大正十二年八月二十六日、霧島会館設立並びに落成式
- 。大正十三年三月十九日、霧島説教所認可
- 。大正十四年九月二十二日、高千穂説教所設立並びに落成式
- 。昭和十五年三月二十日、高千穂布教所認可
- 。昭和二十二年七月二十八日、高台寺寺号認可
- 。現在二代住職 坂口定照師

第三章 その他の

一 創価学会九州研修道場

所在地 大字三体堂字鉢投一八一四一九
 名称 創価学会九州研修道場
 宗派 日蓮正宗（總本山、大石寺）
 設立年月日 昭和四十七年九月六日
 経過

九州研修道場は、全九州の会員の心からの願いと真心の結晶として、昭和四十六年十月一日に着工し、翌年八月二十三日に道場本部が完成、同年九月六日に落成式（開所、入仏式）を行っている。創価学会の研修道場の中では最も大きい研修道場である。同研修道場は、付近に石坂川が流れ、カシやクスなどの林、豊かな緑が広がる景勝の地に建ち、晴天の日には錦江湾、桜島などの雄大な展望も楽しめる。また、敷地内には、数多くの動植物が自然と和合して生息し、まさに自然を呼吸する研修

道場との表現が
ピッタリである。

この霧島の大
自然と見事に調
和した同研修道
場は、九州広布
を担う法友の、
信仰練磨の道場
として、幾多の
人材輩出の機能
をフルに發揮し
てきた。なお、
昭和五十年十一

月に、創価学会創設の恩師、牧口常三郎初代会長の遺徳を後世永遠に顕彰するため、池田第三代会長の提案により「九州牧口記念館」が設置され、また、同五十三年八月には、会員待望の「九州広布記念館」が完成している。現在まで同研修道場を利用した会員は、およそ六九万人を数えるに至っている。生命の尊厳を訴える日蓮大



創価学会研修道場

上人の仏法を土壤としながら、新しい人間文化を築いていくという会員の願いが、この火の国の大地から幾重もの共感の輪となり、広がっていくことを心から期待し、今日も勇躍、前進して広布の活動に汗を流している。

施設の概要

主な施設は次のとおりである（完成順）。

- ① 道場本部
- ② 火の国道場
- ③ 牧口記念館
- ④ 青年道場
- ⑤ 旭日道場
- ⑥ 九州広布記念館

活動内容

創価学会の礼拝施設である同研修道場は、九州を中心にして、会員が本尊に勤行、唱題し、日蓮大聖人の仏法教義を研鑽し、信心の団結のきずなを強めるため、グループ単位で自主的に行う研修会の用に供することを主な目的としている。

第四章 史跡・名所

一 古 跡

(一) 南洲翁宿營の跡

牧園駅（現霧島西口駅）から東北約一〇〇メートルの所にある。その碑文に次のとおり記してあり、碑文の文字は、陸軍中将古海巖潮の書によるものである。



南洲翁宿營之跡

明治十年、薩軍利あらず進んで日洲長井村に集中す。官軍の攻撃甚だ急なり。翁八月十八日選兵約五百を以て払曉可愛嶽の嶮を突破し祝子川鹿川を経て二十一日三田井に進み夫より更に七山神門眼鏡村所上櫻木小林を経て馬関田に達し三十日横川に向う会々官軍の遮る所となる。依りて一隊を留めて之を扼せしめ転進して踊郷宿窪田に到り前田萬兵衛の家に宿す。此処即ち其の宅跡なり。時に官軍と字笠取に於て衝突し銃火を交ふる事數時間。翁は三十一日未明宿所の下金山川の浅瀬を渡り間道を経て蒲生に到り九月一日鹿児島に着し翌二日城山に入り以て二十四日に及べり。回顧すれば翁逝て五十年追慕の情転々禁ずる能はず。依つて記念の為碑を建て翁の宿營由来の大要を録し我村に於ける其の遺蹟を表す。大正十五年十二月建立、牧園村教育会。

(二) 笠取の戦跡

宿營地から東南約二キロメートルの所である（現在のひばりヶ丘住宅・自動車学校付近）。『笠取戦況』によれば、次のようにルボふうに記されている。

八月三十日午後二時頃、薩軍宇笠取に向うや、官軍は今笠取堀切東側老松木（今はなし）を中心とした右上に配

肥薩線隼人駅から北方へ約九キロメートル、同線霧島

(三) 和氣清麻呂公流謫の遺跡

火を焚き各陣地を守りたり。薩軍は笠取を突破するも、踊街道は国分に迂回せる以て、翌三十日午前三時頃当村荒武馮輔を先導とし、蒲生を経て鹿児島に向へりという。

負傷を出せり。遂に夜に入り休戦舞

過なり。兵数両軍共に各々百人内外にして、何れも援兵の望なきを以て、断続的に戦闘

を離れて故に戦闘は開始せられた

てを取り西北に展開し、西方の谷間

列す。薩軍は、市塚堀切の並木にて

にあり、『和名抄』に大隅国桑原郡稻積とある地は、この地のことである。

西口駅から東南約八キロメートルの牧園町大字下中津川にあり、『和名抄』に大隅国桑原郡稻積とある地は、この地のことである。

清麻呂が、奸僧道鏡の怒りにふれて、大隅国に流されたことは史上有名な事実ではあるが、公配流の期間は、称徳天皇の神護景雲三年（七六九）から、光仁天皇の宝亀元年まで、約一年間のことである。しかし、里民の口伝もしだいに薄れ、かつ、文献も乏しいため、その遺跡は永く明らかにならなかつた。英主島津斉彬はこれを嘆き、八田知紀に調査を命じてから、初めてその遺跡が世にあらわれたものである。



笠取戦跡



忠烈和氣公之碑



牧園町史跡案内

「忠烈和氣公之碑」は、明治三十四年秋、子爵税所篤らの建設にかかるものであり、この地北方はるかに高千穂の靈峰に対し、近くには犬飼の瀑布もあるて、景觀すこぶる大である。この碑の付近には、照國公手植松の碑、及び義人稻積翁の碑がある。両碑とも大正十四年一月十六日、薩藩史研究会によつて建設されたものである。

(四) 義人稻積翁の碑

奈良時代の末期、隅州旧桑原郡稻積里に義人あり。稻積



義人稻積翁之碑

(五) 熊襲穴居跡

宿窪田塙浸温泉の下流にある。その背、熊襲穴居の跡といわれている。内部は岩石に囲まれ、数十室に分かれ、太平洋戦争の時は、付近の住民が避難居住したこと

翁と云う。當時、会々和氣公清麻呂の竄せられてこの地に至るや、翁は公の忠烈を崇敬し、身の貧苦を忘れて奉仕する所あり。また、公と力をあわせて中津川の河伯祭の陋習ろうしゆを禁絶し、更に水利を興して灌漑に便し、以て衆庶を賑給しこうしその流汎、今に尽きざるものあり。因て一碑を公の忠烈じんりやく碑の傍に建て、この義人の遺跡を天下諸民に告ぐと云爾じふる。

もある。しかし、奥深く続々、その全部を踏査した者はいない。

また、古代の英雄日本武尊が、天皇の命令で熊襲を討ち取ったという武勇伝にまつわる洞窟である。日本武尊が熊襲の首領川上梶師を退治する時に、女装したところといわれ、またの名を娘着の穴ともいう。岩壁にぽつかりと口を開いた洞窟は、大人でも立ったまま中に入ることができるほどの大きさである。

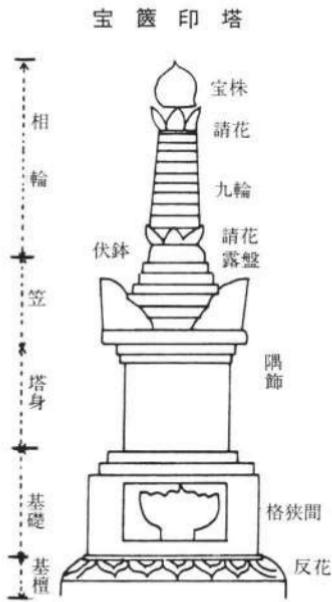
(六) 宝篋印塔（伝・曾我どん墓）

三体堂中福良七八四番地刀迫宅の上方、山の中腹に、昔から「曾我どん墓」と呼び伝えられてきた三基の石塔がある。

いわゆる曾我どん墓と伝えられてきた遺跡は、各地に残されており、母の発願により、日本の国々に建てられたとも伝えられるが、薩藩では、土風振作と孝行をすすめて、随所に建てられたともいわれている。しかし、おそらく盲僧琵琶の物語の中に、曾我物語が含まれて、人々の口にのぼったものと思われる。日向の国を根拠とした伊東氏は、祐経の子孫があるので、ここには曾我墓は

存在しない。しかし、これと競争した島津の領内には、その数が多いともいわれる。この墓を代々みとつてきた井手上氏は、伊東氏（曾我の一族）の出で、近在からのお参りもあったという。

しかし、この石塔の形状は、明らかに宝篋印塔である。宝篋印塔としては形式は古いものである。鎌倉時代から室町時代にかけて、武士たちが明日をも知れない生命の不安におびえて、五輪塔や板碑宝塔などを建立して、来世の冥福を祈った石造建造物の一つであるから、これがたまたま曾我どんの墓と信じられ、伝えられてきたことは、どちらも中世武士の時代のものと考えられた



点で、偶然一致して面白い。

この宝篋印塔を調査された古石塔の研究家黒田清光は、南北朝時代に、人吉から北隅に進出して活躍した相良の一族永留氏が、供養のために建てたものであると明言された（「文化牧園」第二号参考）。

（注）詳細については、中世の「牧園の古石塔」の項を参照のこと。

七 踊城跡

「地理纂考」から引用して、説明にかかる。

踊城は、巣窪田村にあり、当城本丸を新城といふ。二の丸を中之丸といい、三の丸を内城といふ。

東の方は、野頭にして平地に接す塹の跡あり。南より西北は深谷にして、急流の山川、城下を繞る。即ち金山川なり。金山川は、横川邑と日当山邑との分界にして、両邑の地域西に接す。川水深くして渡るべからず。山上より仰ぎ

望めば、石壁数十仞、直立して天險なり。土人の伝に、昔

日敵軍來りて攻めしことありしに、陥る能はず。城中要害堅固なるを恃み、金鼓を鳴らし、舞踊をなして樂しみいた

り。之より踊城といふとぞ。古は横川氏、税所氏、北郷氏、北原氏等の所管となりて沿革一ならず。

八 ツゴドン墓

牧園町宿窪田、田原のタツガ迫には墓地が多い。その入り口にある墓には、正面に「然叟清廓庵主」と記さ



踊城跡

永禄五年、北原氏の将白坂佐渡介、当城を以て島津大中公に降る。



ツゴドン墓

れ、「元和七年辛酉五月二十九日」と紀年がある。また、裏面には「正徳六年二月改之」と記され、右側面に「島津源七郎忠直」と刻されている。これは第十八代藩主島津義弘の弟家久の子で、重虎とも忠直ともいった人で、その晩年、少なくとも慶長十九年（一六一四）からその没年の元和七年（一六二一）まで、三代堂村（今の三体堂）など七十四石の領主として、この地に隠棲した人の墓である。正徳六年（一七一六）は、その没後から八五年（約一〇〇年）を経過した年に当たり、この時はじめて現状に改められたらしく、そこに何らかの原因が介在したということが想像されよう。

「本藩人物誌」（県立図書館蔵）によれば、忠直は家久と樺山善久の女との間に、天正二年（一五七四）に生まれ、三歳の時東郷重尚の養子となつた。重尚は、永禄十二年（一五六九）、川内の渋谷氏が島津氏に降つた時に共に行動し、東郷・水引・湯田・京泊の地を訪れ、引き続き東郷の地を与えられた人である。

島津氏が霧島山の東にまで勢力を伸ばし、伊東氏と相対峙したのは、大永（天文）年間以後久しかつたが、最後にその根拠地を覆滅したのは天正五年（一五七七）である。その後、天正七年以後、家久が佐土原の守りを固めたので、忠直も父のもとに住み、同天正十五年、豊臣秀吉が来攻した時、既に父を失つてゐたが、東郷の城を守つていたのは、その老臣たちであつた。秀吉の本軍は西九州を南下したが、別動の豊臣秀長の軍は、大分を経て南下した。家久はこれと交戦の間に毒殺され、その間、島津氏との和議がととのい、佐土原は依然島津氏の領有をみとめられた。

その後五年を経て起つた文禄の役には、兄豊久と共に朝鮮に渡り、従軍の途上、義弘の命によつて島津氏に復帰、重虎を改めて忠直と名乗つた。時に年一八歳。し

かし、由来病弱で、間もなく佐土原に帰り、姓も東郷に改めている。

時あたかも文禄検地が進捗し、その検地と終了後の新規土地配分に、主力を握っていた都城の伊集院忠棟のひごのもとに、文禄四年九月、菱刈本城の地五百七十余石が与えられ、続いて十二月には、宮崎県田尻村・山野などが加増され、合わせて一〇〇〇石を領した。

その後約一〇年、慶長五年の関ヶ原の合戦には、時代が急転直下した。兄豊久が討ち死にしたのに、忠直はその女に、喜入忠統の男をめあわせ、自らは慶長九年に引退した。三体堂に来たのはこの年ではないにせよ、慶長四年に伊集院忠棟が殺され、にわかに都城を中心として起きた庄内の乱が、彼にとつて甚大な不利となつたものと考えられる。

彼の住んだ佐土原は、伊集院忠棟の領国と境を接していた。彼は若くて、伊集院は老巧の士、薩藩きつての文治派の雄であり、豊臣中央との交渉の深い関係にあったのであるから、忠棟亡きあと、一向宗掃蕩の名目で、武断派に排斥されても、仕方のない立場にあつたのである。

土地の人たちの伝説によれば、彼の邸に夜襲がかけら

れた際、白い鶴がときを告げて、彼の危急を救ってくれた。それから土地の人は、白い鶴を食べないといわれている。この伝説は、あるいは「かやかべ」の人たちから言い出された、霧島信仰から起つたものとも考えられるが、いずれにせよ、彼の身边、一向宗の信仰に關係づけられることには変わりがない。

(九) オイッサマの墓

ツゴドン墓に入つて、かなり離れた路傍に、オイッサマの墓と呼ばれる墓がある。墓に竿石は置かれずに、台石の上に板石に彫られた阿弥陀様の像が置かれている。陶製のすり鉢がかぶせられているので、その像は真新しい光明さえ感ぜられる。この墓石の傍らには、次のように副碑が建てられ、ことの詳細を物語つている。原漢文を意訳して紹介する。

花林長春大姉 父は島津中務大輔家久 母は樺山安芸守善久の女 永禄九年(一五六六)生。

はじめ根占大夫重張に嫁し、離別の後、質となり

都に上る。洛にあること十四年。慶長五年郷に帰る。日州高岡、隅州本城等に移住し、後公命に依り



オイッサマの墓

隅州加治木に移る。元和七年四月二十二日卒。年五
六歳。本城氏輝澄謹誌
オイッサマは、前掲源七郎と同父母の姉弟で、戦国以
來の宿敵として、島津氏に容易に降らなかつた根占氏に
嫁ぎ、若くして夫と離別、秀吉来攻の天正十五年、島津
降伏の人質の一人として京洛に上つた。二一歳の時であ
る。京にあるこ

と一四年、たまたま慶長五年に
関ヶ原合戦が突
発し、脱出、兵
庫沖において戦
い敗れて帰国途
上の義弘に遭
遇、手に手をと
つて日向細島に
上陸、佐土原に
帰つた。慶長六年、佐土原は公
領として没収さ

れたため、弟源七郎と共に知行所日向の田尻に移り、の
ち菱刈の本城に移り、慶長九年、三代堂村に移つたもの
と思われる。

このころのことと思われるが、京都から光明仏という
僧が来たのを、この人は豊久であると称して、これが布
教の手助けをしたということが、本城家文書の中に記さ
れている。长春大姉は、上洛中に、当時一向宗と呼ばれ
た真宗に帰依していた結果、こうした事態が生まれてき
たのであろうが、これはいたく藩のおとがめをこうむる
結果となり、問題の光明仏は、当時刑場のあった鹿児島
の南林寺村洲崎において、斬首された。文書には彼を呼
んで「氣違いもの」と記している。このため質となつて
いた在洛の功績に対し、おくられていた知行五〇〇石は
召し上げられ、義弘の住む加治木に移住させられた。お
そらくその行動を逐一監視して、光明仏の再現を警戒し
たものであろう。

義弘が始良町の蟄居から加治木に移つたのは、慶長十二年（一六〇七）のことであるから、このできごともそ
れ以後のことである。このことがあって、本城家の相
続者に内定していた忠直の子徳丸（後の内蔵助忠頼）の

儀も、取り消されているから、オイッサマと同時に、忠直も処罰の対象となっていたものと思われる。

薩藩で、一向宗の禁止が始まった原因については諸説あり、秀吉来攻の時に、その軍を誘導したのが一向宗の僧侶であったためともいわれている。

しかし、慶長二年に朝鮮遠征におもむくに当たり、隈之城役人あてに、義弘が書き残した捷の中に、「一、一向宗の儀、先祖以来御禁制の儀に候の条、かの宗体になり候もの、曲事たるべきこと」とあって、その由来を記しており、このころに始まつたものと思われる。ここにいう「祖法」も、この年作られた「日新菩薩記」の中に収められている、「魔の所為か 天眼 おがみ法華宗

一向宗に 数寄の小座敷」の歌であるといわれている。

(一) 霧島神社（さんかく堂）

ここにいう「天眼おがみ」はキリスト教のことである。慶長七年、徳川幕府の安堵を受け、島津氏が急いで藩制を整えることとなつたため、この義弘時代の政治体制は、寛永年間に幕府の切支丹対策が進み、鎖国という大方針がとられるにつれて、薩藩では一向宗禁止の方針もよいよ固定し、これが検断のためには、キリスト教

と並んで、「宗門手札」を発行することとなつた。この

「札改め」は、五年ごとに行われる捷で、ほぼ二五〇年、明治九年まで続いた。信徒であることが発覚すれば、番役に呼び出され、厳重な拷問を受け、血判の誓詞を提出させられる習わしになつていて。

こうした藩の方針の固定化に伴い、オイッサマの葬儀も、正規のものが遠慮させられ、没後二〇一年にして、ようやく事の進められた次第が伺われるが、それからあらぬか、先ごろ長春大姉の位牌が薩摩郡鶴田町において発見され、事の次第を如実に物語ついているかに思われる。

一一 古社寺の跡

三体堂中郡にあり、昔は老樹が茂り、中に三角堂と称する堂があつたといふ。今は個人有の土地となり、山は樹木が伐採されて、ほとんど腐食した鉄鉢一本が残されている。古老の言によれば、当堂は霧島神宮の祭神である瓊々杵尊の御母命を奉祀したところといふ。昭

三体堂飯富神社の南、約二〇〇メートルのところに樟橋がある。この辺は、昔から老樹が茂り、林間に樟神社があつたが、無格社の故をもって、廢社として飯富神社

(二) 樟神社跡

和五十五年四月、区民一同の淨財によつて再建された。



霧島神社(さんかく堂)

に合祀され、社跡は田に開墾された。その当時は、老樹の根周辺から多くの素焼きの土器が出土したが、当時はそれが何であるかを知る者もなく、子供の玩具として与え、今は一片もないという。

三 仏閣の跡

(一) 真福院の跡

慈峯山長久寺真福院と称し、今の牧園小学校東隣にあつた本府大乘院の末で、真言宗。本尊聖觀音(座像長六寸日州佐土原周防入道作)十一面觀音新作両軀を安置する。開山忠実法印(遷化年月伝不詳)、松齋公の開基との言い伝えがある。踊郷の祈願所である。

(二) 東光寺の跡

日峯山東光寺といった。今の牧園小学校の南隣にあつた。

「本府福昌寺の末にして曹洞宗なり、本尊薬師如来(座像二尺二寸定朝作文禄四年乙未九月安置)を安し、

開山を喜冠和尚（福昌寺十六世）という。開基年月不詳、当邑の菩提所なり。寺内に貫明公の御靈牌あり。施主の故なり」と記してある。

(三) 祀迦堂の跡

三体堂川畠氏宅付近にあり。仏寺で、祀迦如來の尊像を安置し、庭前にはエノキの大木が茂っていたという。明治初年の廢仏毀釈の折、ここで仏像仏具を集めて焼いたといわれる。この寺についた田を祀迦田といつて、その名が今に残っている。

(四) 觀音堂の跡

飯富神社の一の鳥居前方高地にある。由緒はつまびらかでない。ことど、三角堂・祀迦堂を合わせて三体堂といいうのが村名の由来という。また、一説には、三体堂とは飯富神社に三体の神を祭るゆえ、その名が出たといいう。

(五) 音川山玄龍寺跡

三体堂櫓橋の東方の山中にあつたといいう。今はその跡

に三体堂村旧領主新納氏の墓地がある。一墓碑に、「延宝年間新納市正久珍大口より来り、踊三体堂村領主となりし」とある。のち、山崩れのため堂ヶ平に移したという。

(六) 久習山一雄院跡

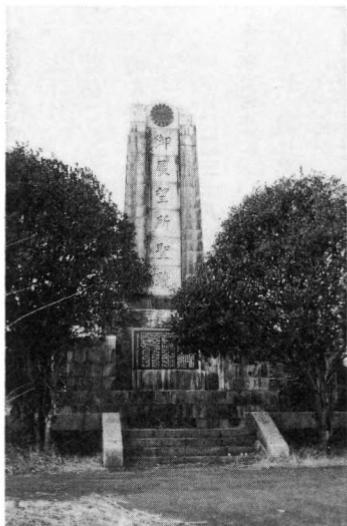
上中津川板越の坂上にあつたといいう。

四 御展望所聖蹟と全国植樹祭跡

牧園町高千穂の町営牧場の一角に、御展望所聖蹟記念塔が建立されている。次にその記念塔碑文を掲げる。

鹿児島種馬所ハ明治二十九年五月創設セル九州種馬牧場ノ後ヲ承ケ同四十年八月改メ称ス其地原野広闊背ニ高千穂峰列シテ前ニ錦江湾ヲ隔テ海門桜島諸山ト対シ煙山浩渺風光雄麗ヲ極ム

昭和十年十一月聖上陛下鹿児島宮崎二県ニ於ケル特別大演習御統監ノ後地方行幸ニ移ラセラレ十六日當所ニ行幸シ具サニ業務ヲ覽サセ給ヒ次テ便殿ヨリ御愛馬白雪ヲ丘上ニ進メ江山ノ勝ヲ鬱シ更ニ玉鞭ヲ揚ケテ城内ヲ馳驅シ実況ヲ巡



御展望所聖蹟記念塔

視シ給フコト多時ニ及フ
此日天氣爽朗四望豁然龍顏特ニ愉色ヲ拂シ奉ル由来薩隅日
三州ハ牧野ニ富ミ書紀ニ日向ノ駒ノ御製アリ良馬ノ產史伝
ニ証スヘキモノ少カラス天文中島津貴久あらひや馬ヲ輸入
シ放牧繁殖具改善ヲ加ヘ勤駿威容ヲ具フト称ス恭シク惟ル
ニ陛下親シク辺陬ニ幸シ牧場ニ臨御シ給フハ洵ニ空前ノ威
儀ニシテ恩榮ノ大ナル感激措ク能ハサル所ナリ

夫レ國民精神ノ作興ハ報本反始ノ誠ニ原ツキ國体ノ明徴ハ
皇國肇基ノ源ニ溯ラセル可カラス今ヤ時運ノ艱ハ民風ノ振
張ヲ促シ国防ノ急ハ馬政ノ發展ヲ要ス宜シク馬產ノ拡充ヲ
図リ國勢ノ興隆ニ資スヘシ
況ヤ皇祖発祥ノ地古來兵馬ノ精強諸州ニ冠タルニ於テヲヤ



杉苗をお手植えの昭和天皇

(「広報まさきぞの」No. 289・昭和59年6月
号から)

〔参考〕第三十五回全国植樹祭

昭和五十九年五月二十日、五月晴れのもと、自然教育
の森で天皇陛下をお迎えして、県内外から一万二〇〇〇

冀ハクハ益祖業ヲ繼キ孜孜事ニ從ヒ以テ叡旨ノ万一二答ヘ
奉ランコトヲ茲ニ同志相謀リ塔ヲ聖蹟ニ建テ以テ報效ノ衷
ヲ表スト云爾

昭和十一年十一月十六日

行幸記念事業期成会

人余りが出席して「第三十五回全国植樹祭」が行われた。陛下は、十一時三十分杉の苗木三本をお手植えされた。現在この杉が約三メートルに成長し、今は亡き陛下の往時の姿がしのばれる。

天皇陛下のおことば

本日、第三十五回全国植樹祭に臨み、ここ霧島山麓自然教育の森において、親しく諸君と会し、共に植樹を行なうことは、誠に喜びに堪えません。

今大会が「二十一世紀へつなごう輝くみどり」を主題にして、関係者の努力により、このように盛大に行われることを、深く満足に思います。

植樹は、森林資源の確保をはじめ、水源のかん養、災害の防止、生活環境の向上のためにますます重要性を加えてきています。

関係者一同は今後とも積極的に植樹を推進し、より豊かな国土の建設に寄与するよう切に希望します。

五 戦没者慰靈碑



戦没者慰靈碑

以来、町内各戸からの募金によつて、昭和三十一年十月十日に竣工した。雄大な霧島連峰が目のあたり望見できる町公民館前の高台に建つ。

これと同時に西南の役・日清・日露戦争招魂碑も、安岩山からここへ移され、盛大な除幕式が行われた。以後毎年慰靈祭が行われている。

六 延命地蔵尊（高千穂）

太平洋戦争関係戦没者の慰靈碑を建てたいという遺族の要望により、昭和三十一年の暮れ、慰靈碑建設委員会

林田ホテルから約一キロメートル高千穂河原への道路

○○メートルの自生地が、わが国における自生南限地として、国の天然記念物に指定されている（大正十二年三

七 犬飼のエドヒガン

を登ると、左手に高さ約二メートルの地蔵尊（石仏）が建立されている。この地蔵尊は土地の人々の幸せを希望して、浄土真宗、高台寺（高千穂）が昭和七年三月、鹿児島市の石工、桜井秀太郎の手によって造られた石仏を建てたものである。



延命地蔵尊

月）。
犬飼の滝下流約四〇〇メートルの地点にあるエドヒガンは、樹齢は一〇〇年を超えると推定されるが、樹勢はなお盛んである。「田代善太郎日記」に記されているもの一つは、この木であろう。「同日記」には、和氣にも自生したとあるが、和氣神社参道入り口に一本ある。開花の時期は三月中・下旬である。



エドヒガン（犬飼）